

(静岡県の文化投資に関する研究会報告書)

文化施設を中心とした文化政策の多面的価値と課題

アーツカウンシルしずおか

静岡県の文化政策は、文化施設への投資を中心として、文化施設での公演展示等を通して県民の創造性を高めることをめざし、経済的効果に留まらない多岐にわたる非経済的な価値を創出していて所期の目的に大きく寄与している。文化施設は、文化政策の根幹を担って、多面的な価値を創造してきた。一方で、施設設立時と比べ、文化へのニーズが多様化、広範化し、文化施設を取り巻く状況も大きく変化しているにもかかわらず、ハードの劣化は避けられず、文化政策の根本ともいべきソフト面とのバランスのとり方が複雑化するなど、課題もまた少なくない。

また、県によって新たに提唱されている「ウエルビーイングの向上」の観点からも、文化施設が果たす役割は重要であろう。

県下の文化施設は多岐にわたるが、ここでは、特色ある三つの施設機関として、グランシップ、県立美術館、そして静岡芸術劇場および静岡県舞台芸術公園の劇場を拠点とする SPAC を取り上げ、その多面的な価値と課題について報告する。

三つの文化施設の方々には、アーツカウンシルの研究会にご参加いただき、ご報告いただいた。ご協力に足して心から感謝申しあげる。

1. 創造性を発揮し、静岡県の文化振興に寄与

文化政策の目標は、「県民生活の向上と、活力あふれる地域創造」にあり、これを実現するために「個性豊かな県民文化を振興」するのである。文化施設で重視されるべきは、創造性の発揮にある。この観点からすると、特に SPAC は、「専用の劇場や稽古場を拠点として、俳優、舞台技術・制作スタッフが活動を行う日本で初めての公立文化事業集団」であり、劇団と劇場が一体化している国内では稀有な創造活動として、再評価すべきであろう。世界の主要な劇団の多くは、SPAC 型の劇団劇場を一体化した総合芸術活動を展開しており、SPAC がアヴィニョン演劇祭の開幕を飾ったことに象徴的なように、世界水準で評価されているのも、こうしたシステムをいち早く取り入れて創造活動に取り組んできた静岡県の文化政策の成果であり、原動力である。こうした SPAC の活動の成果を再評価し、これをモデルとして県文化政策の展開の中に位置づけ、さらに一層活用する必要がある。

静岡県の文化振興という観点では、企画展ごとの県立美術館のきめ細かな活動も注目に値する。静岡文化の顔としてのグランシップの評価も定着している。

アーツカウンシルは、文化政策の目標実現のために、県民すべてが表現活動に主体的にかかわることを提唱している。静岡県ならではの創造性をさらに高めるために、芸術家の先駆的な創造活動を振興するだけでなく、芸術家の活動と県民の文化芸術への幅広い取り組みと

の多様なネットワークの形成が不可欠ではないだろうか。そうした観点からも、文化施設の活動のさらなる飛躍を期待したい。

2. 独創性を発揮して、地域の創造性、地域ブランド化に寄与

文化施設は、文化活動の振興を通して、その存在自体が地域の「顔」となり、外部からの認知度を高める効果がある。

SPAC の国際的な活動は、静岡の文化芸術の質の高さを世界に示し、静岡県の国際的な認知度とブランド価値の向上に貢献している。静岡県立美術館は、周辺住民による地域に根ざしたボランティア活動や常葉大学との連携で学生が茶畑管理に参加したり、ロダン館で文学作品とのコラボレーションによる朗読会を開催したりすることで、地域の歴史・文化資源を多角的に活用し、静岡県のブランド力向上に貢献している。これは、直接的な経済効果には換算しにくいものの、長期的な観光誘致、移住促進、企業誘致といった間接的な経済効果に繋がる重要な「ブランド価値投資」である。文化が地域のアイデンティティやシビックプライドを形成し、競争優位性を生み出す戦略的資産として機能していると言える。また、文化を通じて人々がつながり、交流が生まれることで、地域の中で共に生活していく基盤が形成されていく。

3. 文化芸術を通じた人材支援と機会の創出

文化施設は、次世代の文化芸術の受け手にとどまらず、アーティスト、プロジェクトマネージャーなどの担い手を支援する上で不可欠な役割を担っている。

SPAC は、中高生向けの舞台芸術鑑賞事業や、SPAC 演劇アカデミー、SPAC シアタースクール、すぱっくおやこ小学校、SPAC 学校訪問プロジェクト「ひらけ！パフォーミングアーツのとびら」など、次世代の芸術家や受け手を支援する多様なプログラムを体系的に展開している。これらのプログラムは、若年層に文化芸術との接点を提供し、感受性や創造性、批判的思考力を育む上で重要な「人的資本」への投資となる。特に、SPAC の事業を体験した学生が後に SPAC の俳優やスタッフとして戻ってくる「人材の循環」は、地域社会における舞台芸術のエコシステムを構築している。さらに、SPAC 俳優は、劇場の外でも「静岡あたらしい学校（オルタナティブスクール）」の支援や、「テーブルシアター」といったアートコレクティブによる児童養護施設等での活動を通じて、その専門性を地域に還元している。これは、舞台芸術が劇場という閉じた空間に留まらず、地域社会の様々な場面で創造性を喚起し、貢献し得ることを示す好例である。

静岡県立美術館も、「第5期静岡県文化振興基本計画」の重点施策である「文化芸術に触れる機会の拡充と人材育成の促進」に位置づけられた「ふじのくに文化教育プログラム」を通じて、子どもたちの文化体験を促進している。グランシップも「世界のこども劇場」や「鑑賞の場」を通じて、子どもや若い世代が芸術文化に親しむ機会を県域で提供し、芸術鑑賞や体験の地域格差の解消に貢献している。このような機会の提供は、文化芸術の継承と発展に

不可欠な基盤を築き、地域社会全体の文化資本を高めることに貢献している。

4. 地域への愛着や誇りの醸成と住民の生活の質の向上

各施設の活動、特に SPAC のアウトリーチプログラムや静岡県立美術館のボランティア活動、グランシップの「トレインフェスタ」や「ビッグバンド・ジャズ・フェスティバル」といった愛好家主体のプログラムのよう、地域に開かれたプログラムや住民参加型の活動は、住民が文化に触れ、主体的に関わることで、地域への愛着や誇りを育む機会を提供している。

SPAC での感動体験の共有や、県立美術館でのボランティアの交流、グランシップでの共通の趣味を持つ仲間との出会いは、人々のつながりを強化し、地域社会の連帯感を育む。こうした活動がシビックプライドとなれば、住民の定着率を高め、地域活動への参加を促し、結果的に地域社会の持続可能性を強化する。これは、文化政策が「幸福度」や「社会の質」といった無形資産に投資していることを示し、長期的な視点での社会的な安定と活力に貢献するものである。

5. 文化の多様性と共生社会の実現

文化施設は、多様な人々が文化芸術にアクセスできる機会を創出することで、共生社会の実現に貢献している。芸術文化の大きな特色は、それぞれの創造性が多様であり、万人が一致した評価基準を得られにくい点にある、しかし、このことは、人々の多様な価値観を、それぞれに尊重し、相互に認め合う可能性があるということでもある。

SPAC は、「インクルーシブシアター」として乳幼児や障害のある人たちも楽しめるバリアフリーな作品の創作・上演を行い、文化へのアクセスを広げている。また、「私のあしながおじさんプロジェクト」のように、経済的な理由で鑑賞が困難な子どもたちへの支援も行っている。

静岡県立美術館では、視覚に障害がある人となない人が一緒に展覧会を鑑賞する「見えない人と見える人のおしゃべり鑑賞会」を実施しており、障害の有無を超えてより多くの人々が美的体験を享受できるインクルーシブな環境を整備している。これらの取り組みは、文化芸術が社会の多様性を尊重し、すべての人々が文化の恩恵を受けられる社会を築く上で不可欠な役割を担っていることを示している。

グランシップでは、静岡ゆかりの芸術家と県内特別支援学校の児童・生徒の作品を展示する「グランシップ誰もが Wonderful アート」を実施。障害の有無を越え、誰もが持つ豊かな感性や個性を知ることができる、重要な機会となっている。

6. 文化施設の運営課題と専門性の確保

多角的な価値の創出をさらに推進し、文化施設がその機能を最大限に発揮するためには、現状の運営体制における課題認識が不可欠である。文化施設は、その活動において財政、人事、

そしてプログラム内容に極めて大きな制約を抱えているのが現状である。これらの制約は、良い活動の実現を阻む大きな要因となっており、施設の本来持つべき可能性を狭め、ひいては地域社会への貢献度を低下させてしまうことにも繋がる。

公共の文化施設は、文化政策における重要な役割を担うゆえに、多くの場合その運営費を、行政からの予算に依存している。このため、予算の削減や硬直化した配分は、施設の自由な事業展開を妨げることとなる。例えば、新しい企画や魅力的な展示、市民参加型のイベントなどを実施しようとしても、予算の壁に阻まれ、結果として画一的なプログラムに陥りがちである。また、人事面での制約も深刻である。公共文化施設では、人員配置が行政の枠組みの中で決定されることが多く、専門性の高い人材の確保や育成が難しい状況にある。これは、特に美術館以外の文化施設で顕著であり、専門スタッフの不足は、質の高いプログラムの企画・実施を困難にしている。

これらの制約を乗り越え、より良い活動を展開するためには、文化施設の運営により大きな自由を保障されるべきである。財政的な柔軟性を持たせることで、施設ごとの特色を活かした独自性の高いプログラム開発が可能となる。例えば、地域住民のニーズに合わせた企画や、NPO、企業との連携など、多様なパートナーシップを形成することで、より多角的な活動が期待できる。この「自由」を実質的なものにするためには、専門スタッフの適切な配置が不可欠である。現在、美術館は博物館法により専門スタッフの配置が義務付けられているが、それ以外の文化施設には同様の規定がないため、専門知識を持たない職員が運営に携わることが少なくない。文化施設の活動は、単なる場所の提供に留まらず、文化芸術を通じた地域活性化、教育、多様な価値観の醸成といった多岐にわたる役割を担っている。そのためには、各分野の専門知識を持った学芸員、キュレーター、舞台芸術の専門家、地域連携コーディネーターなどの人材が不可欠である。彼らが持つ専門的な知見や経験こそが、施設の価値を高め、市民にとって魅力的な場を創出する原動力となる。

このように、静岡県における SPAC、静岡県立美術館、グランシップの3つの主要文化施設は、それぞれが持つ独自の強みを活かし、静岡県の文化政策において多角的な非経済的投資効果を創出している。SPAC は国際的な舞台芸術の創造と普及、そして次世代の文化芸術人材育成を通じて、静岡における文化的なブランドの価値向上と社会的資本の形成に寄与している。静岡県立美術館は、デジタル技術の活用と地域に根ざしたボランティア活動を通じて、文化のアクセシビリティ向上と地域コミュニティの活性化に貢献している。グランシップは、多様な文化芸術体験の提供と若い世代への機会創出を通じて、文化芸術の領域を拡大し、地域コミュニティの形成を促進している。また、SPAC を中心に実施されている「SHIZUOKA せかい演劇祭」も、県民が主体的に表現にかかわるコミュニティアートとしても発展の可能性がある、さまざまな連携に期待したい。

これらの施設は個別に高い価値を生み出しているが、静岡県が推進する次期「静岡県文化振興基本計画」の下でのさらなる連携強化により、その投資効果は個別の総和を超えた相乗効

果を生み出すことを期待したい。

(各施設についての概要)

静岡県立美術館

静岡県立美術館は、1986年に静岡市駿河区の日本平山麓に開館して以来、多様なコレクションと地域に根ざした活動を通じて、多角的な価値を創出している。

1. 質の高い多様なコレクションと国際的な展示機能

静岡県立美術館は、17世紀以降の東西の風景画、静岡県ゆかりの作家や作品、富士山を題材とした作品、そしてロダンの彫刻を中心とする近代彫刻など、幅広いコレクションを誇っている。特に1994年開館のロダン館は、《地獄の門》や《考える人》を含む32体のロダン作品を展示し、国際的にも高い評価を得ている点が特筆される。また、狩野派、伊藤若冲、草間彌生といった日本美術における重要作品も収蔵し、時代やジャンルを超えた質の高い展示が多く、美術ファンを魅了している。

2. 地域文化の拠点としての役割

静岡県立美術館は、静岡出身やゆかりのある作家を積極的に取り上げ、地域文化の再評価に取り組んでいる。例えば、2024年の企画展「無言館と、かつてありし信濃デッサン館——窪島誠一郎の眼」では、静岡出身者4名とゆかりのある1名の戦没画学生が紹介された。また、同年に開催された「天地耕作——初源への道行き」展は、これまで見過ごされてきた静岡出身のアートコレクティブ「天地耕作」に、美術館で初めて大規模な展覧会開催機会を提供し、彼らの活動に光を当てた。これらの企画展は、シビックプライドに寄与するところも少なくない。

3. コレクターとの信頼関係と文化資産の蓄積

静岡県立美術館の「開かれた美術館」という理念は、地域住民やコレクターとの信頼関係を築く基盤となっている。講演会やワークショップを通じて地域との対話を深め、2024年のクラウドファンディング（彫刻プロムナード修復に1,059万円超の支援）に見られるように、これまで育んできたコミュニティの支援を引き出している。こうした地域密着の姿勢は、コレクターにとって、美術館が自身の寄贈作品を適切に管理・展示し、次世代に継承する信頼できる場であることを示している。

このような信頼関係がコレクターからの寄贈を促している。代表的な例が、静岡市出身の太田正樹氏（1933-2022）による 2008 年から 2022 年にかけての寄贈である。村上隆、名和晃平、アニッシュ・カプーア、ジュリアン・オピーなど現代美術作品 106 点が寄贈され、2023 年の収蔵品展「太田正樹コレクション展」でその一部が展示された。太田氏の「地域の美術館を支えたい」という思いは、美術館が地域ゆかりの作家や地域文化を重視する姿勢に共鳴した結果である。この好循環は、美術館のコレクションの質と多様性を高め、地域文化の深化にも寄与している。

4. 創造性の波及と社会への貢献

静岡県立美術館の取り組みは、これまで美術に触れる機会が少なかった人々へのアクセスを大幅に向上させている。学校向けの「出張美術講座」では、美術館に直接来館しにくい子どもたちにも、身近な場所で美術に親しみ、想像力を形にする喜びを提供している。

特筆すべきは、視覚に障害がある人となない人が一緒に展覧会を鑑賞する「見えない人と見える人のおしゃべり鑑賞会」である。これは、視覚に障害がある人向けの彫刻を触って鑑賞する「タッチツアー」ととどまらず、静岡県立美術館が障害の有無を超えてより多くの人々が美的体験を享受できるインクルーシブな環境の整備を進めていることを示している。

結果として、美術館が地域との関わり方を広げることで、それぞれのコミュニティにおける文化活動の拠点としての役割も果たし、住民間の交流を促進している。これは、美術が人々をつなぎ、地域を豊かにするツールとして機能し、地域コミュニティ全体の文化的な活性化に貢献している証である。

静岡県立美術館は、こうした活動を通じて、地域文化の拠点として、創造的で多様な社会を育む場であることを証明している。

グランシップ(静岡県コンベンションアーツセンター)

グランシップ(静岡県コンベンションアーツセンター)は、1999 年の開館以来、静岡県の文化芸術振興において、多角的かつ包括的なアプローチでその価値を確立している。

1. 多様な芸術文化体験の提供による裾野の拡大

グランシップは、音楽、伝統芸能、話芸、造形芸術といった多岐にわたる芸術分野の公演や展示に加え、現代詩人を招き、その成果を朗読・解説付きで発表する「しずおか連詩の会」や現代音楽と現代詩を融合させた「坂東祐大&文月悠光——音楽と詩と声の現場 2024」な

ど、異なる分野を組み合わせた独自の企画を提供することで、多様な芸術分野への新たな出会いを創出している。特定の分野に限定せず、幅広い層の人々が気軽に芸術文化に触れられる環境を整えている点で、その価値は非常に大きい。

2. 子どもや若い世代への芸術体験機会の提供

「世界のこども劇場」での体験、現代の言葉で解説する「国立劇場 歌舞伎鑑賞教室」や「グランシップ静岡 能楽入門公演」、そして「出前公演」などのアウトリーチを通じて、グランシップは子どもや若い世代が芸術文化に親しむ機会を県域で提供している。これにより、芸術鑑賞・体験の地域格差の解消に貢献し、幼少期からの芸術体験が「グランシップへの親しみ」へとつながることで、生涯にわたる文化芸術への関心を育んでいる。これは、将来の文化芸術の担い手を育成する上で不可欠な活動であり、その社会的価値は非常に高い。

3. 愛好家主体のプログラムとコミュニティ形成への貢献

「トレインフェスタ」や「ビッグバンド・ジャズ・フェスティバル」のように、愛好家が企画段階から主体的に関わることで生まれたプログラムは、多くの人々を惹きつけ、大規模なコミュニティを形成している。これは、単なる鑑賞の場を提供するだけでなく、愛好家が自らの「好き」を発信し、共有できる場を創出している点でユニークである。このような愛好家主体の取り組みは、文化活動の活性化に貢献し、人々の主体的な関与を促すことで、文化施設としての新たな価値を創造している。

4. 文化芸術支援の基盤構築と交流促進

グランシップの指定管理者である静岡県文化財団の顕彰事業は、長年にわたり培ってきた文化芸術活動支援のノウハウと実績の集大成とも言える。顕彰を通じて、地域の優れた文化活動に光を当てることは、その活動の社会的認知度を高め、新たな支援者や参加者を呼び込む効果を持つ。これは、文化芸術団体や個人が活動を継続・発展させる上での大きなモチベーションとなり、地域全体の文化芸術の土壌を豊かにすることに貢献している。

また、「ふじのくに文化情報センター」における、フォーラムやワークショップを通じて、県内で様々な文化活動を行う人々をつなげてきたことは、アーツカウンシルしずおかにも受け継がれている。

以上の点から、グランシップは、「文化創造と交流の拠点」として、静岡県の文化芸術振興において不可欠な役割を果たしている。その価値は、多様な機会の提供、次世代の育成やコミュニティの形成、そして地域文化支援という、多岐にわたる貢献によって揺るぎないものとなっている。

SPAC（静岡県舞台芸術センター）

SPAC（静岡県舞台芸術センター）は、静岡県に拠点を置く公立の文化事業団体として、静岡から世界に発信する舞台芸術の創造を高いレベルで達成しつつ、地域社会への多角的な貢献を通じてその価値を確立している。

1. 舞台芸術の創造と発信における国際的拠点

SPAC の最も顕著な価値は、世界に通用する独自の舞台芸術作品を創造することを使命とし、それを国内外に発信する拠点となっている点にある。専属の俳優と専門技術スタッフを擁し、国際的な共同制作や演劇祭への参加を積極的に行っている。特に、芸術総監督・宮城聡による独創的な演出は、フランス・アヴィニョン演劇祭のオープニング作品として法王庁中庭での上演(2017 年)をはじめ、海外でも高く評価され、日本の舞台芸術のプレゼンス向上に大きく貢献している。これは、単なる作品上演にとどまらず、新たな芸術表現の創造とその業界への具体的な提示という点で、唯一無二の価値を持つ。SPAC の成功事例は、地方都市から国際的な文化発信が可能であることを示す好例であり、その知見やノウハウを共有することで、日本全体の文化振興に寄与する可能性を秘めている。

2. 質の高い舞台芸術の招聘と鑑賞機会の提供

SPAC は、自ら作品を創造するだけでなく、国内外の優れた芸術家や劇団を招聘し、質の高い舞台芸術作品を静岡県民に提供している。毎年開催される「SHIZUOKA せかい演劇祭」はその象徴であり、多様な文化背景を持つ作品に触れる機会を創出している。これにより、静岡県にいながらにして世界水準の舞台芸術を鑑賞できる環境を整備し、県民の文化的な視野を広げる役割を担っている。

3. 次世代の舞台芸術家育成と鑑賞教育の推進

SPAC は、将来の舞台芸術を担う若手芸術家の育成にも力を入れている。具体的には、「SPAC シアタースクール」や「SPAC 演劇アカデミー」を通じて子どもや中高生に演劇の面白さや奥深さを伝え、舞台創造のプロセスを体験する機会を提供している。また、中高生鑑賞事業「SPACeSHIP げきとも！」や出張劇場などにより、学校教育では得がたい舞台芸術の鑑賞体験を県内全域で展開し、感性豊かな人材の育成に貢献している。これは、文化芸術の未来を見据えた長期的な投資であり、その教育的価値は計り知れない。特に、鑑賞後のアンケート調査において参加者の高い評価が確認されている点も、その成果を裏付けている。そして、こうした事業を体験した学生が、後に SPAC の制作部や創作・技術部のスタッフとして戻ってくるという「人材の循環」は、SPAC が単なる芸術提供団体ではなく、地域社

会における舞台芸術のエコシステムそのものを構築していることを示唆している。このような人材の育成と還流は、持続可能な文化芸術活動の基盤となる。

4. 地域との連携と多様な人々への文化包摂

SPAC では、社会へのフェーズとして「SPAC2.0」の方針を標榜し、地域に根差した活動を重視し、舞台芸術を通じて地域活性化や交流人口増加に貢献している。駿府城公園での屋外上演や、ストリートシアターフェス「ストレンジシード静岡」の開催、さらには「インクルーシブシアター」として乳幼児や障害のある人たちも楽しめるバリアフリーな作品の創作・上演など、多様な人々が舞台芸術に触れる機会を創出している。また、「SPAC 県民劇団育成事業」や、現在実施している「私のあしながおじさんプロジェクト」、SPAC 県民月間、ボランティアグループ「SPAC シアタークルー」のように、県民が舞台芸術に主体的に関わる機会や、経済的な理由で鑑賞が困難な子どもたちへの支援も行うなど、文化へのアクセスを広げる努力は、地域社会への貢献という点で高い価値を持っている。

さらに、SPAC 俳優は、劇場の外でも「静岡あたらしい学校」の支援や「テーブルシアター」といったアートコレクティブの活動を通じて、その専門性を地域に還元している。これは、舞台芸術が劇場という閉じた空間に留まらず、地域社会の様々な場面で創造性を喚起し、貢献し得ることを示す好例である。

5. 公共劇場としての役割と専門性の確立

SPAC は、日本初の公立文化事業集団として、俳優や専門技術スタッフを擁する本格的な劇場運営を実践している。これは、企画・制作・上演・教育・普及に至るまで一貫した文化事業を自律的に展開できる体制を確立していることを意味する。劇場・ホールで働く専門人材が、鑑賞者のニーズを深く理解し、新たなプログラムを開発する取り組みは、文化施設の専門性と公共的役割を両立させる模範事例といえる。

以上の点から、SPAC は、静岡県から世界へと発信する創造的な舞台芸術の拠点であり、同時に地域に深く根差し、多様な人々に開かれた文化芸術のハブとしての役割を担っている。その価値は、単なるエンターテインメントの提供にとどまらず、芸術文化の創造、教育、普及、そして社会貢献という多岐にわたる側面において、揺るぎないものとなっている。